

映画を利用した日本語教育

尹 福 姫

1. はじめに

観点によって違うと思うが、私たちが映画やテレビドラマなどの映像を通して得る情報と、主に文字で構成された教科書を通して得る情報とを比べると両者間には質量ともに大きな差があるだろう。そのような意味で前者の映像は語学教科書では味わえない、教材としてのとても魅力的な役割を果たしてくれるといえる。実際私の授業をとっている学生の中には独学で日本語を学び、すでに大学に入学する前に上級レベルの日本語を習得した学生がかなりいる。彼らの話によればただ好きな日本のアニメやドラマ、映画を思う存分見ているうちに自然に日本語がわかってきたとの告白をよくしているものである。これは文法教育などのいわゆる体系的な日本語教育を事前に受けていない学習者であっても場合によってはレベルの高い日本語を立派に駆使できるとの証拠であると思う。

私どもの同徳女子大学の日本語学科では90年代の末ころからこうした映像、特に映画による日本語教育の効果を期待し、授業での導入を積極的に検討した結果、2001年から「映像日本語演習」という科目を新設して現在にいたるまで授業を続けている。ちなみにその背景には、2000年に同徳女子大で開かれた韓国日本学会と日本の日本語教育学会が共同で主催した国際シンポジウムが一つのきっかけを提供してくれたといえる。シンポジウムの主題でもあった、いわゆる「総合的日本語教育」の一環として「映像日本語演習」という授業も推進された結果となったのである。最初からこの授業を担当している者として私が感じたことは、日本語教育における映画の教材としての可能性はうまく活用さえできれば今後も期待以上の効果がますます期待できるということである。さらにいえば、映画は日本語教育だけに止まらず、日本人と日本文化を含め、日本そのものを知る上で非常に興味深い教材であると私は思っている。

本稿では主に「映像日本語演習」という授業での実例をもとに、学習目標を含む授業の概要についてまずみる。次に、授業に入るまでのプロセスやこれまで取り上げた映画の目録をあげ、授業の内容について若干述べる。さらに実際の教育現場で日本の映画がどのように教材として使われ、どんな役割を果たしているかなどについて教師の役割と授業での問題点や今後の課

題などをもあわせて考えてみたい。

2. 「映像日本語演習」の概要

この授業では、映画などの映像を通して日本人の考え方や生き方、文化などを理解し、生き生きとした生活日本語を学ぶこと、また様々な日本映画を鑑賞しながらこれを最高の日本語教材及び異文化理解の教材とし、その教育的な効果を高めることをめざしている。具体的には受講学生をいくつかのチームに分け、チーム別に映画を選び、発表と討論によって授業を進めることにしている。

学習目標は次のように要約できる。

- ① 日本、日本人、日本文化について総合的に理解する。
- ② 映画の伝えるメッセージやその他の主題を取り上げ討論をし、現実問題を含め日本の表と裏、その両面を知る。
- ③ 映画を通じて現実で通用する生の日本語の表現を習得し、自由に活用できるようにする。

授業の対象は主に大学4年生で、日本語はわずかの学生を除けばほぼ日本語能力1級程度の上級レベルの学生たちである。たまにはかなり日本語のできる3年生以下の学生が授業をとる場合もある。

学習の期間は1学期16週の授業で週に2回、1回75分の授業である。16週といっても最初の週には授業の紹介や講義案内、役割分担などで忙しいため実際の授業は難しいし、最後の週は期末試験があるため、だいたい14週の授業と思えばいいと思う。

また、授業のやり方は授業が軌道にのるまでに初めは一部講義もあるが、主に学生による発表と討論によって進められ、1学期で6編内外の映画を鑑賞できるのが一般的である。

教材は主にビデオ、DVD、CD及び各種の映像資料を利用し、その他副教材としてインターネット、映画のガイド・ブックなどを使っている。ときには「キネマ旬報」や「シナリオ」など映画関係の日本の雑誌も立派な副教材となる。

学生の最大な関心事である学期末の評価は発表や発表資料の内容、適切な討論の主題選定、宿題による追

加資料作成の誠実度、発表チームによる討論への招き方及び聴衆一人一人の活発な参加、出欠、期末試験、その他チームワークなどを考慮し、総合的に評価している。

3. 本格的な授業に入る前の準備

3.1 1週目

1回目の授業では今後の授業について案内し、学生のプロフィールを提出してもらう。プロフィールでは姓名とかの基本的な事項を書くほかに、この授業についての提案や学生の希望などを書いてもらい、今後の授業の方向を決めるひとつの参考にする。授業の終わりには韓国で上映された日本映画についての調査を宿題として出し、次の授業へ向けての備えとする。

2回目の授業ではまず、「チーム分け」が中心である。受講者の人数によって決まるが今までの経験では4-5名程度を1組で編成するのが一番合理的でチームワークもよかったと思う。その次に、前の時間の宿題でもあった、調査してきた日本映画のタイトルを黒板に書き並べ、教材としての「適」「不適」をみんなで考える。そして「適」の判定を受けた映画の中からチーム別に好きな映画を選ぶ。

映画を選ぶ基準はいろいろ考えられるが、ほぼ次のような基準で選んでいる。

- ① 授業で取り上げるにふさわしい内容で、たとえば、「非暴力」「非エロ」の映画
- ② できれば図書館やレンタルショップなどで自由に貸し出しのできる映画
- ③ できればインターネットでいろいろな資料が検索できる映画
- ④ できればガイド・ブックなど、参考資料の豊富な映画

また、最初はテレビドラマなども鑑賞の対象にしたが、いくつかの理由で現在は対象外としている。それはまず第一、ドラマは映画にくらべ入手が容易でない点、第二、映画にくらべシナリオなども手に入りやすく、そのため外国の学習者用の参考資料も少ない点、第三、連続ドラマが多く、時間に制限のある授業にあまり適しない点などが理由として考えられる。

3.2 2週目以降

2週目から3週目の間は、今後の発表に向けて学生の提出資料が準備できるまで教師が選んだ映画、あるいは学生が圧倒的に見たがる映画を見て、教師が主導的に授業を進めることが普通である。ここで学生たち

はその後の発表の進め方や映画の鑑賞ポイントなどがある程度把握することができるだろう。

ほぼ4週目から本格的に学生による発表が始まる。

発表の資料は全てのチームが一斉に決められた日までに提出することにする。その理由は他のチームの発表にもみんなが集中できるためである。この授業が実施されて何年間は発表の順番に従って各チームが別々に資料を提出したが、自分たちの発表の準備で心が忙しく他のチームの発表に集中できなくなる現象が一部現れた。そのため授業がなかなかまとまらなかったりしたので、これには今も十分気をつけることにしている。

学生による授業はまず、みんなで映画を見ることから始まる。普通90分以上の映画が多く、75分の授業では時間がたりない。そのため場合によっては、1週間2回の授業を全部映画を見るために費やす場合もあるが、映画をみんなで鑑賞するのはとても大事なプロセスである。というのは映画を最初から最後まで見通すことによって、まずストーリー全体の流れをつかみ、これが基礎になって映画の製作意図を正確に把握し、背景となった時代や環境などの相関関係を理解することができるからである。これができた上で、学生はその後の授業に積極的に参加することができるのであろう。

映画を見終わってからは自分たちが準備してきたパワーポイントなどの資料を使って発表をする。映画を見る観点や映画の中のみんなに紹介したい日本語の表現、韓国と違う独特な日本文化の紹介など、項目をとりあげるセンスがチーム別にまちまちであるが、大きなミスがない限り学生の発表に教師はできるだけ口を出さないことにしている。ここで聴衆の学生には簡略なレジメが配られる。また教師にはレジメの他に準備のプロセスから始め、時間の関係で発表はできなかった参考資料や映画についてのメンバーの鑑賞など、たくさんの資料の盛り込まれた分厚い資料が回ってくる場合も多い。

この学生の発表で大事なことは、発表の締めくくりとして必ずみんなで討論をする時間をもつことである。討論の主題は映画の伝えるメッセージと関係のある場合が普通であるが、外国人の目に映った、日本人には見えないかもしれないごくディテールな点にまで及ぶ場合もある。時によっては討論が激しくなりすぎて本論からはみだし、なかなか話がまとまらないときもあるが、ここからが教師の出番で教師はすばやく場内を整理し、討論の本筋に戻るように注意をしなければならぬ。また討論はできるだけ日本語で行われる

ようにして、日本語で自分の意見をしっかり発表する力を養うこともこの授業のめざす目標の一つである。

4. これまで取り上げた映画の目録

学生たちは本当に多様なジャンルの映画が好きであるが、先ほど見たように私たちの授業で扱うにふさわしい基準で映画を選んだ結果として、これまで主に取り上げた映画の目録を以下にあげておく。やはり学生の手に入りやすい映画になりがちで、ここ数年の間に発表された映画が多い。今見て見ると、ラブストーリーもあれば心温まる家族の話、在日韓国人の問題を扱った社会性の濃い内容、「電車男」のようにオタクでウェブサイトで没頭中の青年という、つい最近の社会現象を扱った映画にいたるまで、まさに多様な分布になっている。

（複）は授業で数回取り上げた映画をさす。以下、順番は特に意味はないが、人気のあった映画をできるだけ先にあげておく。

ちなみに、②はアニメで、私は今までアニメは普通の映画にくらべ、教材としての効果が劣ると思ってあまり学生にお勧めしなかった。しかしながらアニメが大好きな最近の学生の意見を最大限反映させ授業に取り入れた結果、意外と効果もありおもしろかったため、これからは積極的に教材として使用することを検討している。

また、学生の発表では見逃しがちであるが、学期のはじめの教師主導の授業では日本の古い名作映画などを見ながら日本映画の系譜などをたどってみるのも意味あると思って今まで数編見ている。たとえば、③にあげた小津安二郎監督の「東京物語」は1950年代の映画で、当時の日本における家族のあり方、家族間の絆などを覗いてみるができる。またやがて起こる家族関係の変化、その背後に伴う社会の変化などの予兆が感じられる点などいろいろ考えさせる映画で、韓国のそれとの比較もできて非常におもしろかった。

①

「Love Letter」(複)

「Shall We ダンス？」(複)

「鉄道員」(複)

「シコふんじゃった」(複)

「踊る大走査線」(複)

「ウォーターボーイズ」(複)

「GO」(複)

「四月物語」(複)

「サトラレ」(複)

「東京日和」

「Swing Girls」

「ジョゼと虎と魚たち」(複)

「座頭市」

「下妻物語」(複)

「花とアリス」

「Always 3 町目の夕日」

「電車男」

「嫌われ松子の人生」

「メゾン・ド・ひみこ」

②

「となりのトトロ」

「千と千尋の神隠し」(複)

「耳をすませば」

③

「東京物語」(複)

「キューポラのある街」

5. 異文化及び総合的教材としての映画

先ほど、映画は日本語はもちろん日本人や日本文化、日本を知るうえでも非常に興味深い教材であると言及したが、だとすれば具体的にどんな内容をそれぞれの映画を通して学び取ることができるだろうか。ここではいくつかの映画を例としてあげ、検討してみたい。もちろんここで取り上げたのはごく一部の映画で、このほかにも様々な映画を通していくらかでも多様な観点から学び得る内容がたくさんあると思う。

5.1 「Love Letter」

「お元気ですか」というセリフで韓国で有名になったこの映画は、日本映画としては初めて韓国で大きな関心と話題を呼んだ作品であろう。この映画のおかげでおそらく日本語を一度もなかったことのない韓国人でもこれを見た人なら、だれでも知っている日本語が「お元気ですか」ではないかと思う。文学作品を含め、どんなすばらしい日本語教材よりも、日本語教育における映画1編の影響というものを実感させてくれたのがこの映画である。

さて、「Love Letter」はお葬式のあとのお墓参りの場面から始まる。そこからがすでに韓国の学生には日本語、さらには日本文化について教えてくれる教材として機能する。つまり、お葬式の模様とかお葬式にふさわしい服装、その場にふさわしいあいさつのことばなどから始め、韓国とのいろいろな点における比較にまで発展していくことができる。

また、映画に登場するおひな壇などを見て、ひなまつりの話やそれと関連してこどもにかかわる日本の年中行事の調査にまで発展していくこともできる。

それに、主人公の男女の「イツキ」がよく出会った中学の図書館での模様、たとえば現在の韓国ではほぼ見られなくなった図書カードの作成の模様、さらに成人した女の「イツキ」が勤務している北海道の市立あるいは区立図書館の模様など、そこで彼女が打っている今はなつかしいワード・プロセッサ、また北海道の大雪の話とか数え切れないほどの刺激を映画の中から得ることができると思う。

さらに、映画のタイトルがヒントを与えてくれるが、手紙の書き方として恋人や恩師へ送る手紙の差を比較してみたり、実際に手紙を書いてみるのもいい実践学習となろう。授業中に手紙を書く時間が足りないなら宿題とするのもいいアイデアである。その場合、もちろん教師はしっかりと内容を添削してフィードバックする必要がある。そうすることによって理論と実際に学習者の中で一致するようになるからである。

5.2 「Shall we ダンス？」

この映画に描かれた社交ダンスは今はそうでもないだろうが、一時韓国では不倫カップルの出会いに欠かせない手段として考えられた時期がある。日本でも程度の差はあるだろうが、社交ダンスを踊るというのは、少なくともこの映画の中での描写を見るかぎりでは、表に出して言えない妙な照れくささが隠れているような気がする。人々の前でそれを公表するためには少なくとも勇気が要るのを主人公の杉山の例を見てもわかるだろう。しかしながらその反面、「アオキ」というコミックなキャラクターを登場させ、主人公の杉山と対照させながら日本のサラリーマン社会の多様な断面を覗かせてくれた周防正行監督の力量は韓国でも評価され、「Shall we ダンス？」は韓国でも多くの観客を熱狂させた映画として記憶されている。

この映画を通しては多様なダンス関連用語の韓国との比較もおもしろかったが、その他普通の日本のサラリーマンの生活模様がごく自然に描かれていて、韓国のサラリーマンとの比較対照ができるのもおもしろかった。たとえば、韓国では普通見られない自転車を利用した出勤や退勤の模様、似ているようでやや違う電車の中の風景、退勤後の居酒屋—ここでは壁にかかっている値段が付いたおかずのメニューまでがいい日本語教材となる—など、平凡で多様な庶民の日常を通して日本人の生き方の一断面を覗き見ることができる。また庶民の将来の夢として一戸建て住宅への思いやそれとかかわる住宅ローンの返済に関する情報

など、日本の住宅事情の一部について学ぶこともできる。

5.3 「鉄道員」

この映画は非常に内容に重みがあり、特に浅田次郎の原作があつて原作と映画の両方を比べてみるおもしろさがある。また、以上で見てきた映画とは多少違う観点から日本や日本人について理解するように案内してくれる。

たとえば、時代及び空間的な背景として廃線電車をめぐる北海道の過去と現在、地域経済をめぐる日本の裏と表について真摯に考えてみる機会を提供してくれる映画である。

また、蒸気機関車からc62、d51などで代表される日本における汽車の変転史・車種の変転史など、意外な点での学習効果も期待できる。

それに日本のおせち料理と関連して、おせち料理の基本とそれを入れる重箱の使い方、お屠蘇を飲む習慣、普段の食卓での食器の並べ方など食生活をめぐる鑑賞のポイントもこの映画の欠かせない魅力である。

さらに、乙松駅長で代表される勤勉な日本人の姿とその背後にある、家族が先か、仕事が先かで悩む心あたたまるヒューマンドラマのストーリーは討論の材料としてもいい素材を提供してくれる。

6. おわりに

これまで見てきたように、映画は文学作品や教科書とは違ってそれを視聴する人の感性や知性に直接働きかける効果があるので、ましてや今のマルチメディアの世代に向けてはこれ以上ない、いい語学教材であると思う。

ここでひとつ付け加えておきたいことは教師の役割についてである。学習者主導の授業だからといって教師は何もしなくてもいいと思ったら大間違いで、教師は始終コメンテーターとして授業の流れを確実に把握しておかなければならない。つまり先ほども述べたように、学生による発表の方向や討論の方向が本筋からそれないように常に気をつけなければならない。また、映画のみどころ、大事な日本語の表現、知ってほしい内容などを学生が見逃してしまうとさりげなく注意を喚起させたり、できれば教師は映画の内容について事前にしっかりと理解しておくべきである。

私は「映像日本語演習」という授業の初期に、経験不足も一つの理由であろうが学習者主導の授業が定着する前の講義式の教師主導の授業でつらい思いをしたことが何度もある。学生は授業で受身になりがちで退屈そうな態度をとったりして教師として授業を取り仕

切るのがたいへん困難な時期があったが、今まで見てきたように学生主導の授業に転換してから、現在は次第に改善しつつある。今後はより一層学生の興味を刺激し、積極的に授業に参加させ、常に授業が活気を保つようにと気を配ることに重点をおきたい。教師が映画をどのように授業に積極的に取り入れていくかが今後にも本当に問われることになるが、まずは教師主導ではなく思いっきり授業を学生に任せることを再三強調したい。教師がうまくコントロールさえできれば、映画を視聴覚教材として積極的に使うことに、これからも大きな効果が期待できることは間違いないことだろう。

以上、授業の肯定的な側面だけが主に浮き彫りになったようであるが、問題点がまったくないわけではない。たとえば、学期末の評価が終わった後、たまに学生たちから不満の声があがったりする。というのは、各々のチームを組んで発表をする中で発表の準備に熱心なメンバーもあれば、そうでないメンバーもいるわけで、にもかかわらず成績には差がないことによる一種の副作用である。もちろんこれはチームワークの問題であるからあくまでもそれぞれのチームの責任であるのを教師も学生も知ってはいるものの、みんなが積極的に参加する授業をめざすための方法を今後の課題として検討する必要性を感じている。

その他、注意しておきたいこととして映画の編集による著作権の問題が起こる可能性がある点をあげておきたい。今まで学生たちの好きなように編集したりした例は一度もないので、今後ともさほど問題にはならな

いと思うが、念のためしっかりと注意しておくべきである。

最後の結論として繰り返しになるが、2001年から今までの7年間「映像日本語演習」を担当してきた者として私は、映画というのは日本語教育はもちろん、日本、日本人、日本文化を知る上で無限な可能性をもつすばらしい教材であると再び強調しておきたい。そのためこれは教師の私の役割として問われる問題であるが、今後も積極的に授業に取り入れ、いかに有効に活用できるかの問題を常に工夫し、さらなる教育的な効果をあげるために引き続き研究していきたいものである。

参考文献

- 猪俣勝人（1974）『日本映画名作全史（戦前・戦後編）』、教養文庫
佐々木基一（1993）『映像の芸術』、講談社学術文庫
佐藤忠男（1996）『日本映画史』1～4巻、岩波書店
周防正行（1998）『「Shall we ダンス？」アメリカに行く』、太田出版
飯島朋子（1999）『映画の中の図書館』、日本図書刊行会
水谷修・李徳奉編（2002）『総合的日本語教育を求めて』、国書刊行会
窪田守弘（2000.4-12月）「映画に描かれた日本人」（月刊『日本語』所収、時事日本語社）

（雑誌）

『カイエ』（1979）特集・映画「文学から映像へ」

Bokee Yoon／同徳女子大学 助教授